



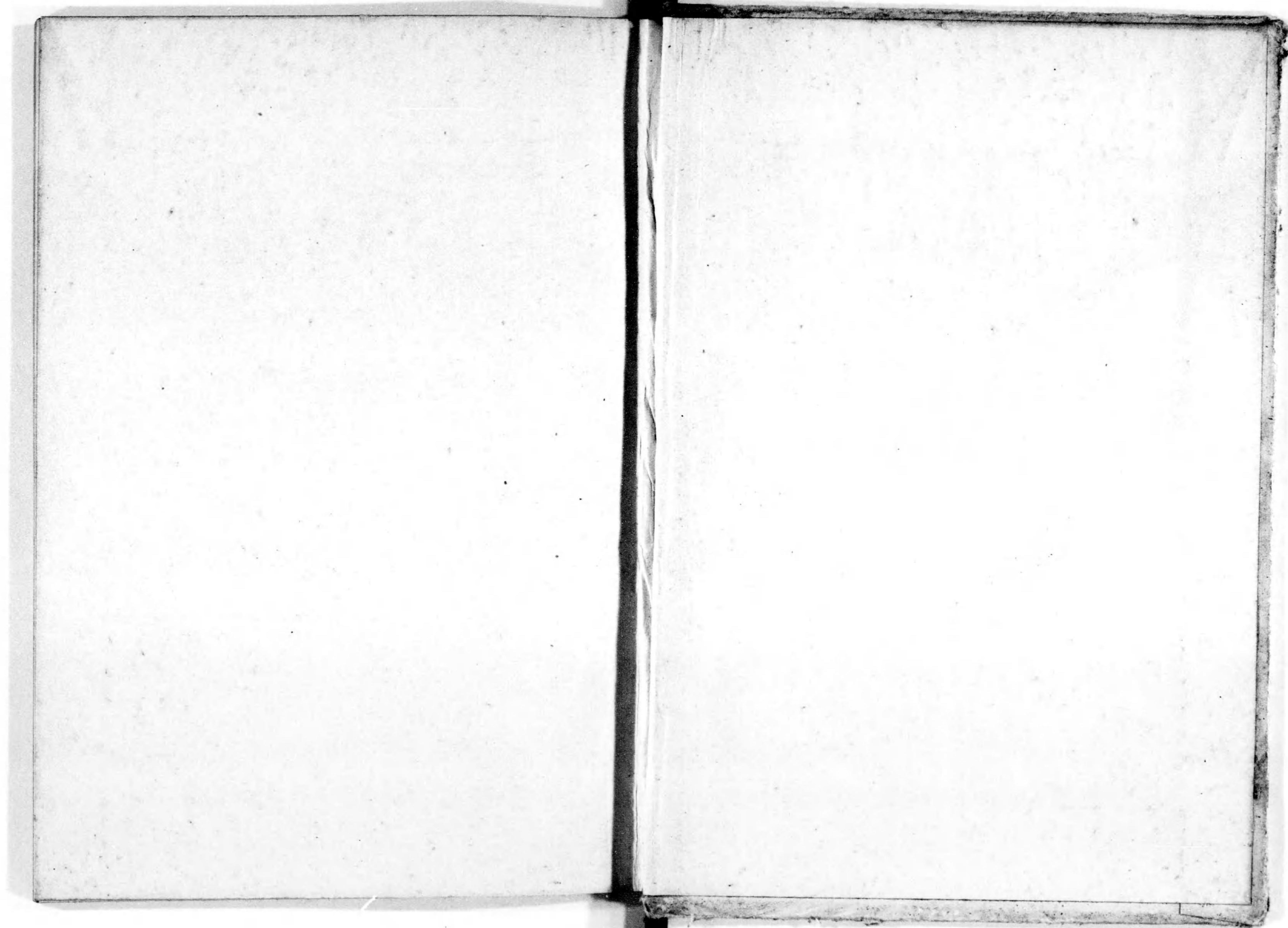
探偵奇談

血吹雪水晶



始





特100
122



血
吹
雪
水
晶

大正
8. 11. 10
内交

はしがき

時代の要求と、時の推移によりて傳說的驚異あれば、化學的萬能の風潮も流るゝ現代、今や人心の恐怖は生存競争の源を開き、遂には法律上の悲活劇を起すに至るは往々あり。

茲に繚く一卷は、血吹雪の魂よく悪玉を挫いて善玉を助く、一種の大悲活劇になれる探偵奇談なり。

大正八年十月

著者 識



至陽





探偵 奇談 血吹雪水晶 (上卷)

本間 滉 著

叔父の遺言

— 書置は何處に —
— 怪支配人の立聞 —

春は何處からごもなく訪れた。

一雨毎なる朝ら日和に、校庭の櫻の蕾も柔かくなり、柳の若葉も、翠色に輝いてゐる。

中學第五年課の秋本太郎は、放課の鐘が最う、先刻に鳴つて、歸る筈の處だつたが、餘り懸て近づく試験の爲に、頭を使ひ惱んだ爲に、ズキン／＼と痛んで仕方がなかつたので、校庭に来て、其處に轉がつてゐた捨石に腰を下ろして、凝つと、青く澄んだ春の空合や、足元に擴がつた、些やかな庭の草木の若い新しい葉なぞを、見守つてゐた。

四圍の空氣は澄んでゐる。虫の飛ぶ羽音さへも、聞漏さぬ程、静かだ。

太郎は、眞底から深呼吸なんぞしたけれど、額に濡れた汗なぞを拭ふてホツとした。

怎うやら、幾らか氣分も可くなつたので、静かに立上ると、彼は直ぐには教室の方へ、戻らないで、機械體操なぞをしてゐた。こんな事をやつてゐる内に、頭の痛みが、次第に忘れられて了つた。

で、最う此位に清々すれば可からうと思ひ、運動場を通つて、二階の教室に入つた。

教室には誰も居らなかつた。

最う先刻。時間が來ると皆は先を争つて、歸つて了つたので、人の氣ななかない。

ガラーンとした教室の中に在つて、彼はそろ／＼歸り支度にか

がつた。

そして、風呂敷に包んだ教科書を小腕に抱いて、彼はさつさと門を出た。

門を出てから家へ戻る迄の十五六丁。その間、彼は、絶へず、頭に浮んで引放れないのは、叔父の病氣の事である。

叔父の秀原卓也は、長い事胃腸を病つて、床に就いた儘である。再三再四、これ迄、恚んなに叔父は此胃腸病の爲に、危い淵に陥入りかけたらう、それが昨今では、やうやく、幾らか快方に向ひかけて、來たのに、昨夜となつて、又も、突然に苦しみ始めたのだ。

太郎に取つては後にも先にも、實際何物にも換え難い、大切な叔父である。

太郎が生れると程もなく兩膝が没してから後は、叔父は、太郎を自分の家に引取つて、何呉れとなく、面倒を見て呉れた。

そうして、學校も今では中學の五年生である。

叔父は實業界でも名打の財産家であるが、叔父には又一面學者肌の處が在り、化學とか天文なぞと云ふ事には非常に達識してゐる。

「叔父さんの病氣、怎うか一時も早く全快して呉れると、可い。怎うか神様一時も早く叔父さんの病氣を、元の通りに直して下さ

いました。」

と、太郎は心に念じながら、道を急いだ。

家に歸つて叔父さんの御様子を見つて見ると、

「今、お医者さんが、お歸りになつたばかりだよ。今はジツとお休つてらしやるから、傍へ行つては可けません。」

と、叔母は、太郎に云つて聞かした。

「そうして、如何です。怎んな御様子なんです？」

「お医者さんの仰言れるには、幾らか今の處では落着いて居るやうだから、そつと眠らして、置かないと可けないと云ひましたよ。」

「然うですか。ぢや、僕、後にしませう。」

と、太郎は叔母の言葉に、幾らか安堵の胸を、撫下した。

自分の室に入つて机に向つて、試験前の事故、最う少し勉強し

よりと思つたが、到底も凝としてゐられない。

恰度、其處へ叔父が若い時分、色々世話になつた同郷の友の――

「今は没つて居ないが――娘と云ふ雪子が入つて來た。今年十七

太郎とは、同じ家に斯うして月日を送つてゐる爲に、自然と仲

も良い、氣性も合ふ。

雪子も、太郎と同じやうに、幼い時に両親を失つた爲かあらぬ

か、賢い娘で、暇さへ問さへあれば、学校の以外、學問裁縫等

少しも怠らない。

最う現在では兄妹より親しい。

「雪ちゃん。君、最う歸つてゐたの、早いねえ、僕遅くなつちまつた。」

「妾だつて、今歸つたばかりよ。」

「雪ちゃんの方も試験たらう、僕の方は最う直ぐだから、急がしくつて目が廻る位だ。」

「然う？妾の方もよ。」

「お互ひに大いに、勉強しようね。君も優等取り給へ。」

「え。」

等と打語らうてゐたが、

「雪ちゃん、叔父さんの病氣は、今日は幾らか可いんだそうだつて、今、叔母さんに、それを聞いて、幾らか安心したヨ。」

「でも、お医者さんが、今夜にも又激變が來ないとも限らないなんて云ひ置いて行つたんですつて。」

と、雪子は美しい顔を曇らせた。

太郎はそれを聞くと乗出して、

「え！今夜にも。」

と、思はず驚いたやうに、叫んだが、太郎は後が云ひ得ないやうに、曇つた顔を俯向けた。

すると其夜の十一時の事だつた。

叔父は非常に苦しみ出した。醫者は三人から駈け着けた。

けれども、叔父の命は既に旦夕に今は迫つてゐたのであつた。

苦しそうな息の上下を看護しつゝ、眺めた叔母や太郎、雪子の胸の切なさは何んなだつたらう。今は最う望の綱も切れて了ふのだらうか？と、各自の目からは熱い湯のやうな、涙が止度もなく溢れた。

叔父は聽て霞んだ眼を僅かに見開いて、四圍の人に云つた。

「俺の命は最う旦夕に迫つてゐるのだ。今は最う言ひ残す事はないが……たつた一つ俺は頼みたい事がある。外の者は最う皆遠慮

して呉れ、只、太郎と雪子だけ、此處に残つて呉れ。

叔母はそれを耳にすると、涙に濡れた眼を向けて、

「何を、貴方、そんな氣落な事をお云ひです、今が大切な場合ですから、心を丈夫に持つて、此病氣に打勝つて下さいまし。」

「いや、お前達の長い、親切な看護は、俺は大きに心から感謝しておる。が、俺も最う年ぢや、今度の病には到底打勝つ事は駄目ぢや。氣使ひするなく。最う俺は斷念めて了つてゐる……何事も云はずに、太郎と雪子のみを此處に置いて、お前等は他の座敷に退つて呉れ。」

と、瘦せた手を振つて、叔父は斯う云つて恚うしても訊かないの

である。

幾度も併し乍ら、叔母はそれに逆らつて、力を着けた言葉を掛けたが、却つて叔父は怒りの籠つた聲で、イラ／＼するに、
『構はずに置いと云ふたら、俺も最う七十に間近いのぢや、黙つて云ふ通りにしろと云ふたら。』

何は兎もあれ、病篤い病人の此言葉に、より以上、逆ふてはと思ふて、叔母は一先づ、周囲の者達を、太郎、雪子以外は全部、他の室に引取らせた。

後に叔父は、太郎と雪子に向つて、
『皆、最う出たか？』

ど、打震へる聲で問ふた。

『はい、最う皆、他の座敷に被來いました。』

ど、太郎が進み出てハツキリ答へた。

叔父は微かに打頷いて、

『然うか。それで可し、俺は特に臨終の際にお前達二人に云ひ残して置く事があるのぢや、さ、最うソツと、此方にお寄り。』

『はい。』

ど、二人は涙を目に一ばい溜めた儘、静かにそつと、叔父の方に近寄つた。

『他でもない、俺が若い時分の頃から話をしなければ、解らない

が、俺は今から恰度四十年前、俺が二十九の年ぢや。その當時俺はある船に乗つて、印度のカルカッタに行く途中、海の上の大暴風雨で、印度から餘程隔つて一孤島に、難船した爲、俺一人押し流れた。勿論、他の乗組員は怎うなつて了ふたやら、薩張皆目分らんぢや。俺は海の上に約半ヶ月と云ふものは、飲まず食はずに漂ふたが、天の祐か、やうやうに一つの無人島のやうな處に着いた。云ふ迄もなく其處に着いたが、食べるものどては、何んにもなかつた。斯うして居つては、餓死をせにやならんから、何か口にするものはないかと、島の彼方此方を探し廻つた。すると、恰度、内地で云ふやうな、バナ、の村のやうな木が見當つた。や

れ、嬉しやと、それに、やうやく據上つて、怎うやら斯うやら一時の腹は出來たと云ふやうなものぢやが、さて、これから、先怎うして本國に歸つたものだらうと、色々心を悩んだが、怎うも仕方がなかつたのぢや。すると其夜の事、俺が海邊で色々、考へてゐると、眞暗な鼻を摘まれても解らないのぢや。」
二人は片唾を飲んで、他目も觸らずに叔父の口の動くのを打眺めてゐる。

叔父は尙も續けた。

『その眞暗な、墨のやうな空の一角から、突然にギラ／＼と、光つて俺の前に、落ちたものがあるのぢや。吃驚して、それを見る

と……」

太郎と雪子は、今は化石したかの如く、凝と、叔父の面のみ瞠める。

「恰度、卵位の形のものである。手に取つて見ると、非常に熱い。そして、不思議の事には血を吹いたやうに、その形の中から光を發した。よくよく見るとそれが水晶……何處から落ちて来て俺の手に入つたものか、俺には一向合點が行かん。その時だ、俄に後の方から、ワー／＼と云ふ人の聲に、仰天してそれを掴んだ儘、里程で云へば三四里も逃げ延びたが、俺は遂々、氣を失つて了つた。それから五六時間も時移つたか……ふと、俺が目醒ま

すと、人を喰ひそうな大きな男が、俺に向つて、

「何故、此島の護神様を奪ひ取つたか、重罰の刑に處す處であるが、今回一度だけは、助けて遣る。さあ此舟に乗つて歸れ。」

と、ばかり古びた獨木舟を浮べて、それに僅かばかりの食用を乗せて呉れた。俺は島の神様に、水晶が仰め奉られてある事に吃驚した。何か上手に、彼等を欺き、其晩、こつそり水晶を盗み取つて。」

と、急に老人は四邊を見廻した。

凝と此處迄、聞いてゐた二人も思はず見廻す。

「或處に俺はそれを隠しておいた。それは非常に得難い、血吹雪

水晶ぢや、その儘に残して四十年、實に俺はこれが心残りで仕方がない。太郎、雪子、それを隠して置いた處は、それ其處の……中に……了つてあ……る……」

叔父の呼吸は突然激變して來た。顔色は土のやうだ。二人は愕然とした。同時に駈寄り、

「叔父さん、確りして下さい。く。」

と、呼んだけれど、早、叔父は何事をか微かに、口にしたのみで次第に力無くなつて來る。

「叔母さん、皆さん、叔父さんの御容體が急に……」

一同は聞くか聞かずに、飛鳥の如く轉げ込んで來たが、早叔父

の命は事切れてゐた。

あゝ不可解、不可解なる最終の途切れた言葉？

抑も、二人の少年少女は何處にこれから活躍するであらう。

此時である。障子の影に店の支配人西澤親子が凝と先刻からの老人の物語を聞き取つて了つてゐた。

そして「か領さ、彼等は影の如く消へ去つた。」

怪しき人影

——おヤツと叫ぶと——

——電氣は消えたッ——

其後、怪しき支配人西澤親子は、事務室に歸ると、したり顔
で、

「安二、聞いたか。」

「お父さん、人間萬事賽翁が馬と云ふが、まつたくですな。」

「さうだ、俺達にも運が向いて来たと云ふもんだ。」

「血吹雪水晶とは珍しいぢやありませんか。」

「日本にやアないな。」

「世界にだつて稀でせうよ。」

「何しろ、相手のない品物だから、手に入りや、何千萬圓、何億
萬圓だか知れないよ。」

「三井、岩崎以上の成金になれると云ふものですな。」

「安二、さアそのつもりで、探しに出かけやうぢやないか。」

「處が、肝心の遺言状を見なきやア、何處にその血吹雪水晶が隠
してあるやら解らないぢやありませんか。」

「成程、さうだ、その遺言状は一體何處にあるんだらうな。」

「さア……」

と、安二も困惑の顔をして、

「あの子供達だつて、主の言葉を聞きとられなかつた程ですから
知りますまいよ。」

「すると五里霧中なんだな。」

「併し、その方が却つてよいのかもしれないよ。」

「何うしてだ。」

「もしも、子供達に知れちや、折角の儲け仕事を奪はれてしまひますからな。」

「尤もだ。」

「私の考へちや、この邸内のしかも、居室か事務室内のごとくに隠してあると思ひますよ。」

「ぢや探して見やうぢやないか。」

「さうです、それが論を待たざる早手廻しです。」

「お前は室の外に居つて見張りをしてゐろ。」

「よろしう御座います。」

ど、安二は室の出入口の處に立つて、四邊に注意の眼をギョロつかせた。」

西澤健一は忪の見張りに安心して、第一番に、秀原卓也の椅子に腰かけて、机の抽斗を一つのこらす引き開けて見たが、遺言狀らしいものは見當らなかつた。

「困つたなア。」

ど、健一は血走つた眼をして、唸る様に恚う云ふと、机に頬杖をついた。

「お父さん、見當りませんか。」

「ないな。」

「机ばかり見たつてしかたがありませんよ、他の方もお探しにならねばなりませんよ。」

「さうだ。」

と、健一は、スツくと立ち上つて、書棚を、掻き廻しはじめた。

この時、安二が慌て、這入つて来て、

「お父さん、大變ですよ。」

「えッ。」

と、驚いて、

「大變つて、何が……」

と、おどろくした態度。

「奥さんが来ましたよ。」

「さア、困つた、何うしやう。」

と、云つてる處へ、人の近づく足音が聞えて來た。

「さア大變。」

と、尙更、うろたくうちに、未亡人の静子が、しどやかに這入つて來た。

健一はうろたへたうちにも、取りなした態度で、笑顔で迎えて「奥さんですか。」

『少々用があつて来たんですよ。』

と、泣き腫した眼で二人をジイと見つめた。

けむつたい二人はマジくしながら、

『御用ならお呼び下さればお伺ひしましたのに。』

『別に急な用ではないのですけれど、主人の亡くなりましたした後仕末について御相談したい事がありますので……』

『あツさうですか、本當に此度は飛んだ事になりましたなア。』

と、ワザとらしい涙を見せた。

『けれど御心配は御無用です、萬事私が御相談相手になりますから……』

と、殊勝らしい事を云つた。

『有難う御座います。』

と、嬉しげに云つて、

『私はもう、貴方をのみお頼りにするより他に道はないのです。』

『いや、そう仰有ると、却つてコソバツコイ感じがしますよ。』

『いゝえ、もう私等一家族は、主人に亡くなられては木から落ちた猿同様なんですから、何うか不憐と思つて、何くれとなくお世話をお願いしますよ。』

と、未亡人はシンミリとした調子だつた。

『お世話申すと云ふ處ぢやありません、今までの御恩返しに、よ

り以上働く決心ですから、御安心なさいまし。』

『有難う、本當にその言葉を聞いて安心しましたよ。』

と、未亡人は吻つとした。

『でまア、奥は何かと取りまぎれて居ります處へ、我々が差し出がましく出ると云ふのは不可ないと存じまして、實は事務の方の整理にかゝつて居りましたので……』

と、悪才に長けた安次は、氣先を折つて、恚う辨解した。

健一もニヤツと笑つて、

『さうです、第一此の方を整理しませんと、御主人が亡くなられたと云ふのに、取り引きの方から、何のかのと云はれては面喰ふ

と存じまして、忤と取り急いで、この方にかゝつたのであります
はい。』

と、健一も尤もらしく云つた。

未亡人は少しも事務の方は知らぬので、尤もと存じて、却つて
これら支配人親子は忠實な人間と思ひ、ますます感謝の念を深く
した。

『もう、夜も更けて居りますこと故、何うかお仕事は明日にして
お通夜をお願いしたう座いますか。』

と、未亡人は疲れた身體を、椅子から起した。

『さういたしませう、安二、さア、奥さんのお供をして奥へ行か

う。』

と、何か眼交せをしたので、安二もそれと察して、二人は未亡人について、奥の間へ来た。

そこには主人卓也の死體が安置されており、太郎や雪子が眼を泣き腫らして回向をしてゐた。

『坊ちゃん、お嬢さん、この度は飛んだ事になりましたなア。』

と、安二は殊勝らしい事を云つて坐つた。

* * * * *

その夜も更けて、真夜中頃の事であつた。

誰も居ない筈の事務室に墨い二つの人影が、何かこそくと物をしらべてゐた。

丁度、自分の室に用があつて、その前を通り合せた雪子は不審に思つて、

『誰かしらん。』

と、鍵の穴から、室内を覗き込んで見た。

内の人影も、足音に氣がついてか、はつととして、振り返ると同時に、

『あら。』

と、雪子は小聲乍らも叫ぶと同時に、はつと電気は消えてしまつ

た。

『誰か来て下さいよ。』

と、この時、始めて、雪子は叫んだ。

その聲に驚いて家の者をはじめ、太郎、未亡人もかけつけた。

『何うしたんです。』

と、太郎は一番さきに聞いた。

『今、私がこの室の前を通りますとね、室内でコソコソ話し合つてゐる聲が聞えましたから、何事かと覗いて見ますと、人が二人這入つて居りましたのよ。』

『へえ。』

と、未亡人も吃驚した眼を睜つた。

『おやと、思ふと同時に電氣が消えてしまつたんですよ。』

『不可思議な事があるもんだなア。』

と、首をかしげた太郎は、生れつきの大膽な子供故、

『僕が中へ這入つて、しらべて見ませう。』

『いゝえ、もしやの事があると不可ないから、およしなさいな。』

と、雪子は心配して引きとめたが、

『なアに大丈夫ですよ。』

と、扉を開けて、眞暗な室内へ這入つた。

未亡人も雪子も心配して、オド／＼してゐる處へ、後ればせに

かけつけた支配人親子は、眞面目な顔をして、
「何うしたんです。」

と、聞いた。

「今ね……」

と、雪子は一伍一什を物語ると、安二も健一も吃驚して、

「兎に角、中へ這入つて見ませう。」

と、二人が這入ると同時に、パツと電氣がついた。

不思議な書棚

——音もなくスーと開いて——

——あッ穴だッ穴だ——

「不可思議だなア。」

と、太郎は四邊を見廻した。

それもその筈、二人が室へ這入ると同時に電氣がついたからであつた。

「おや、美しく整理がしてある事。」

と、未亡人は云つた。

それを聞くと西澤親子は、ドキツと胸を叩かれる思ひがしたが、さあらぬ體で、

「不思議ですなア。」

と、健一も感心したらしい顔をした。

『先刻まであんなに取り亂して置いたのに。』

ど、安二も相槌をうつ様な事を云つた。

『何か、失つたものがないか、調べて御覽なさい。』

ど、未亡人はビク／＼しながら云つた。

『さうですね。』

ど、書棚に近づいた時、

『やア……』

ど、叫んだ。

一同は吃驚して、

『何うしました。』

ど、その傍へかけよると、

『ど、ごらんなさい。』

ど、窓を指さした。

窓の戸は開け放されてあつた。

『あッ盗人が這入つたんですね。』

『さうらしい。』

ど、健一は尤もらしく云つて、

『尤もこゝから這入る以上は、盗人にちがひありませんよ。』

『品物を調べて見ませう。』

ど、安二は書類から、何かを手當り次第にかき廻して見て、

『別に何もなくなつては居りませんよ。』

『すると不可思議な盗人なんですね。』

『盗人に這入つて何も盗まないなんて。』

と、太郎は不審らしく四邊を見廻した。

『それもお嬢さんが、この室へおいでになつた事を知つて、何も取れずに逃げたんぢやありませんか。』

と、安二はそれを主張して、この騒ぎをうやむやにしてしまふとした。

『さうかもしれませんよ。』

と、未亡人は安心して、

『何も盗まれません、誰も怪我をしなかつたとすれば、これに越した事はありません。』

『まつたくです。』

と、健一は親實らしい事を云つて、この事件をもみ消してしまつた。

けれど太郎と雪子だけは口には云はないが、變だと思つた。

『兎に角、おそいから、戸締りを嚴重にして、寝みませう。』

と、未亡人は云つた。

それで一同はその室を出た。

未亡人と太郎と雪子は、奥の室へ戻つた。そしてその事につい

て話し乍ら、寝やうとしたが、何うしても寝つかれなかつた。
『雪さん、貴女の見たその人影つて、どんな風をして居りましたね。』

と、太郎は好奇心にかられて聞いた。

『それについていすがね、今まで騒ぎに取りまぎれて、うつかりしてゐましたが、あの西澤の親子にそつくりでしたのよ。』

『へえ。』

と、太郎は驚いて膝をすゝめた。

『すると、西澤の奴等が何かしくんだ事ぢやなからうか。』

『真逆そんな事はありますまい。』

と、未亡人は事もなげに打ち消した、

『けれど、顔を見ても一癖ありげな奴等ですからぬ。』

と、太郎はなかく重大視してゐる。

『私もあの人達は好かないわ。』

と、雪子も賛成して云つた。

『でもなかく親切な人達ですよ。』

と、未亡人もなかく信じない。

『けれど伯母さん、伯父さんがおなくなりになつた以上は、支配人なんか用がありませんから、暇を出したら何うですぬ。』
と、太郎は何か考へがあるらしく、恚う云ひ出した。

『さうは行きませんよ、伯父さんが亡くなられたと云つても、なか／＼御用が多いから、さう／＼暇を出すと云ふわけには行きませんよ。』

『でも、もう私も卒業しますから、萬事私が後の事をやります、伯父さんの亡き後をいゝ事に、どんな事をし出かさな限りませんから、ころばぬ先の杖で、今のうちに暇を出してしまつた方が安全でせうよ。』

『さうは云ふけれど、此後とも一生懸命に家の事について働いてくれると云ふのに、そんな無慈悲な事が出来ると思ひますか。』

『私も伯父さんの御恩に對して、伯母さんの後の身の事や、お家

の事について申上げるのですよ。』

『そりや解つてます、兎に角、葬式の終るまで伯母さんは考へて置きませう。』

と、その話しは、その儘になつて、一同は眠りについた。

その話しを誰も知るまいと思つて居つたのに、悪支配人だけに抜け目のない西澤親子は、チャント立ち聞きして知つてゐた。

「さう大變な事になつた。」

と、悪人に似合ぬ健一はビク／＼者だつた。

けれど悴の安二は大膽な奴だけに、

「お父さん、安心なさい、たか／＼男の子一匹に女の子一匹、それ

に婆だれが一匹加つて何が出来るものですか、今にこの財産はお父さんと私のものにしてしまひますから安心なさいよ。」

と、事もなげに云つて、ニヤ／＼笑つた。

『けれどなア、あの子供達が、お前、俺達をこの家から放逐しやうと、未亡人をたきつけてゐるぢやないか。』

『それはしつて居りますよ。』

『知つてゐて悠々もされないぢやないか。』

『放逐されたら、されたで、例の血吹雪水晶を探し出して、成金になるまでいすよ。』

『さう云へば、遺言状を探し出す時は驚いたね。』

『まさか娘が見てゐやうとは思ひませんでしたよ。』

『何うやら盗人と云つてもみけしはしたものの、俺達だと感づいたせ。』

『なアに心配はいりませんよ、未亡人は私がうまくまるめ込みますから。』

『お前に限る、流石は大學を卒業したけに、智慧があるよ。』

『お父さん、そんなに煽てたつて駄目ですよ。』

『あはゝゝゝ、まつたくだ、併し遺言状を見ねばあんしんが出来ぬが、出して見せてくれ。』

『何んな事を書いて置いたんでせう。』

と、二人は四角につままれた封筒の一通を大切さうに出して、四邊に注意して開封した。

遺言状

我れなき後は、印度を離れて南百二十哩の海上の孤島に行くべし。

その孤島の三角山に血吹雪水晶が隠しあり、血吹雪水晶は世界に唯一個しかなくつて、その價は世界の何物をもつてしても買ひ得ざる高價なる珍品にして、それを持参し居る時は如何なる危難も救はるべし。

地圖は常家の中央の下方を探すべし 卓也

と、認めてあつた。

『さア解らない、その地圖が、この家の中央と云ふと、太郎の室がそれだが、疊の下か何かに隠してあるんだらうが、困つたものだ。』

『私の考へでは、子供に注意して居れば大丈夫ですよ。』

『そして何うするのさ。』

『子供は主人の遺言によつて、屹度、それを探し出すでせうからそれを奪つて行くより他に方法がありませんね。』

『さうだ、それが一番よい。』

と、健一は頷いた。

『ぢや明日から、それにかゝりませうよ。』

ど、その夜は経ぎた。

その翌日卓也の葬式は盛大に行はれた。

數多の名士や家族にかこまれて、卓也の死體は火葬場に送られて、一片の煙と化してしまつた。

その夜、太郎と雪子は、一室に集つて、

『ねえ、雪さん、伯父さんの遺言もあるんだから、學校はよして僕は血吹雪水晶を探しに行つて來やうと思ふんですよ。』

『私も行きたいわ。』

『女なんか駄目さ。』

『でも女の一念ツて恐いものよ。』

『それぢや、一緒に行く事にしやう、それにしても第一番に伯父さんの臨終に仰有つた遺言状を探して見やう、それには屹度、水晶のありかが書いてあるにちがひないから。』

『書齋を探して見ませう。』

『それがいゝわ。』

ど、二人は、洋室の書齋へ這入つて、手當り次第に探しはじめた

『さア何處にあるかな。』

『まアゆつくり探さうぢやありませんか。』

ど、尙も探すうち、太郎が書棚を開いて、本を取り出す時に、何

うしたハツミか、その大きな書棚がスーと音もなく、引つ込んだ
「おやッ。」

ど、思ふまもなく、太郎は危くも、その下へ落ちやうとした。
その下は眞暗な穴であつた。そして階段になつてゐた。

「雪さん、来て御らん、早く〜。」

「何うしたの。」

ど、雪子は調へ中の机の抽斗を投げ出して、太郎の傍へかけよつ
た。

守護神の白蛇

—地下室の大秘密—

—寫眞の裏の地圖—

「まア、こんな處に何うして穴があるんでせうね。」

「さア、僕も解らない。」

ど、太郎は地下を覗き込んだ。

「何うして、書棚があんな處へ行つたんでせうね。」

ど、雪子は不審と驚きの眼を睜つた。

太郎は雪子の顔を見乍ら、

「僕が書棚の本を出しかけてゐると、何うしたハツミか、音もなくスーと書棚が、彼方へ行つてしまつたのさ。」

「おやッ。」

ど、思ふ間もなく、僕はこの穴の中に落ちる處だつたのさ。」

「本當に危ないわね。」

「これは何か仕掛けがしてあるんだね。」

ど、こう云ふ事の好きな太郎は、好奇心にそゝられてその邊を探して見ると、傍に小さいボタンがあつた。

「おや、こんな處にボタンがついてゐますよ。」

ど、引つばつてみたがとれなかつた。

そして何の氣もなくギユツと押すと、不思議にも、書棚がまた音もなくスーと、元の通りに前へ進んで来て、ピッタリ納まつた。「は、ア、こりや伯父さんが、何かの爲めに拵へてお置きになつた地下室か何かあるんだな。」

ど、頷いて、

「雪さん、下へ降りて見やうぢやないか。」

「え、行つて見ませう。」

雪子も大膽な少女だつた。

二人は早速懐中電燈を持つて、太郎と雪子は手を握り合つて、書棚を押し開けて、ダン／＼と、光りを頼りに階段を下つた。

この時、二人の後へ尾行して来た男があつたが、彼等二人には気がつかなかつた。

約十段も下ると、それから真暗な穴道になつて、横は二人ならんで歩ける程の廣さを、上は頭がつかへる程でもなかつた。

二人は電燈の光を頼りに、そろそろと歩きはじめて、二間程來ると右へ曲る道になつてゐた、それを尙も進んで行くと、こんどは左へ曲つた。

そして最後の左へ斜に曲つて行くと、鐵門の前に出た。

もうそれが行きどまりで、左にも右にも折れる道はなかつた。

『もう、こゝがドンツマリよ。』

と、雪子はいぶかしさうに云つた。

『さうだ、この鐵戸の中が何か、一つ透入つて見やう。』

と、二人は力一杯に門を抜いて、室内に透入つた。

それを見た不思議な男は、物をも云はずに、ソツと鐵戸を閉めて、門さへ確くかけて、ニヤリと凄く笑つた。

そしてコソくと、もとの書齋へ上つて來ると、例のボタンを押した。

すると例によつて、例の通り書齋の書棚なスーと音もなくもとの通りになつてしまつて、このボタンの知らない人には、この下に慙うした地下室のある事を夢にも知る事が出来なかつた。

太郎や雪子とて、假令、鐵戸を開けて出て来たとして、書棚がこの通りになつてしまつたので、とても書齋へ出る事は出来ないのである。

されば聲がぎり根かぎり、呼んだとて、叫んだとてその聲とて、この地下からは聞えないのであつた。

所詮、彼等二人はこの地下に落命せねばならぬ運命になるのであらうか？

そんな事のあらうとは、露更ら知らぬ太郎と雪子とは、懐中電燈を照して、室内を見ると、

『あれッ。』

と、雪子は叫んでバツタリ仆れた。

その聲に驚いて、太郎は室内をよくも見きはめないで慌て、雪子を抱きかゝへて、

『雪さん、何うしたの、雪さん、しつかりしなくつちやア不可んよ。』

と、耳に口あて、叫んだので、その聲が通じてか、一度氣絶した雪子は息を吹き返した。

『何うしたの。』

『あれ、あれ、ガイコツが……』

と、云ふので、太郎はギョツとしたが、電燈をさしつけて見ると

成程、年老りたる爲めか、ガイコツが立つてゐた。

大膽な太郎はよくく見ると、それは拵へ物だつたので、

『なーんだ、こりや人形ですよ。』

とは云つたものゝ、太郎も吃驚したので、吻つと安心の胸を撫でおろしたのであつた。

『まア、人形……』

と、雪子は吻つとして、

『それで安心したわ。』

『氣が弱いからね。』

『だつて女ですもの。』

と、雪子は氣極り惡氣に云つた。

『これから印度へ渡らうと云ふのに、今からそんな心細い事を云ふ様ぢや、とても一緒に行かれませんよ。』

『あら、嘘よ、私、大丈夫だわ、私だつて日本帝國の人民ですもの、命がけでやれば何んでも出来ますわ。』

『大氣焔ですね。』

と、笑つて、

『それ、蛇が……』

『あれッ。』

と、雪子は思はず叫んで、太郎に獅噛みついた。

「嘘、嘘、蛇なんか居るもんですか、大丈夫ですよ。」
「だけご太郎さんは非道いわ、あんな事を云つて、私をおごかす
んですもの。」

「あまり大氣焰を上げるから、本當にそんな氣丈夫な心を持つて
るのか、何うかどためしてみたりますよ。」

「そんな事をしなくつても、いざと云ふ時には、本當に大丈夫で
すわよ。」

「その大丈夫が心細いのだて。」

と、云ひ乍ら、電燈で四邊を見ると、いろくの虫が古びた陰氣
臭いこの室に、ウヂくしてゐた。

そしてガイコツは嶮然として立つてゐた、その手には何か大き
な包みらしいものを握つてゐた。

その傍に亡き伯父、卓也の寫眞が額の中に入れてあつて、笑つ
て二人を見てゐる様であつた。

それを見た太郎は、思はず近よつて、

「お、伯父さん。」

と、生きたる人に物云ふが如くに、伯父なつかしさに抱き上げ様
とした時に、額の後から、ニヨロくと一匹の白い蛇が出て來た
『あッ。』

と、流石の太郎も飛び上つた。

「何うしたの。」

と、雪子は顔を乍ら聞いた。

「へ、へびだ。」

「あら、またからかふんでせう、厭な太郎さん。」

と、雪子は笑つた。

「いや、こんどは本當だ、しかも白い蛇だ。」

「えッ。」

と、雪子は蒼白になつて、

「太郎さん、何うしたらいいの。」

と、おろ／＼聲になつた。

「まあ待ち給え。」

と、太郎は電氣で、ジツと蛇の様子を見ると、白い蛇は人懐しきうな眼をして、二人を見上げてゐた。

別に危害を加へさうも見えぬので、太郎はやゝ安心して、

「大丈夫だ、蛇は危害さへ加へなければ、人間に仇はしない。」

と、それでも充分注意して、額を取り上げた。

その時、もう三十年からも経てゐるもの故に額の一端が朽ちて居て、ポロリと落ちた。

「こんな處に伯父さんの寫眞を置くよと云ふのは不思議ですね。」
と、シゲ／＼と眺め乍ら、太郎が云ふと、

『ほんとにさうよ、伯父さんの寫眞で、今までのものにこれよりよいものはないから、室へ持ち帰りませう。』

『さうませうね、併し額は朽つてゐるから、中の寫眞だけ持つて行きませう。』

と、雪子に電燈を持たせて、太郎は額をこはして、中の寫眞を出した時、何氣なく、寫眞の裏に何か書いてあるのを見たから、

『雪さん、電燈をこつちへ貸して下さい。』

『何うかしたの。』

『何か書いてありますよ。』

と、電燈の光りで、寫眞の裏を見ると、

『血吹雪水晶の有所』

と、最初に大きく書いてあつた。

『メめたツ。』

と、太郎は思はず叫んだ。

『何が書いてあるの？』

と、雪子も顔を出した。

『伯父さんの遺言なすつた血吹雪水晶の有所が書いてあるのですよ。』

『あら。さう。まア、それは嬉しい事ね、早く読んで聞かせて下さいな。』

と、雪子はいき／＼した眼を寫眞の裏に注いだ。

山の中央より左へ十足目の木の蔭の石を動かして
穴を這入るべし。

穴の右側六つ目の穴に入り、蛇の長さの三倍目の
處を堀るべし。

山の場所は遺言狀にあり蛇は我が家の守護の神な
り、危難は必ず救ひくれるものなれば、大切に飼
ふべし。

萬一悪心起したる時は白蛇は必ず、その人を殺
すべし、なれどさに非ざる時は危害を加ふる事絶

對になし。

血吹雪水晶は、その持ち方により、激變ある不
思議のものなれば充分注意すべし
そは蛇に教はるべし。

卓也

と、読み終つて、

『へえ、こりや不思議な事だなア。』

と、感心すれば、

『まるで傳説にある様な事ですわねえ。』
と、雪子もロマンチックな眼を輝した。

「するとこの蛇は、秀原家の守護の神ですつて、我々を守つてはくれるが、危害は加へないんですつて。」

「さういふ、さう云へば、いつか話しの折に、伯父さんは蛇に救はれたと有仰つたが、この蛇の事ですわ。」

「さうだつたね、すると、この大秘密を、この蛇が守護してゐたんでせうよ、さアこれだけあつたら大丈夫だ、早く寫眞を持つて室へ歸りませう。」

「蛇もつれて行きませうよ。」

「他のものに知れると困るぢやありませんか。」

「でも、これは私達を守護してくれると云ふんですもの、私は命

にかけても、大切に人に知れない様に飼ひますわ。」

「ぢや、連れて行きませう。」

「蛇や、蛇。」

と、犬を呼ぶ様になると、太郎は笑つて、

「蛇や、蛇ぢや、可笑しいね。」

「あら、だつて、名前がないぢやありませんか。」

「我々を守護すると云ふんだから、守と名をつけませうよ。」

「あら、いゝ名ですわね、さア守ぢやん、被來い。」

と、両手を開けたが、動きさうもない、雪子はもう恐しさを忘れて、犬でも抱く様に、白蛇を抱かうとした。

すると白蛇はする／＼と逃げて、ガイコツの上にトグロを巻いてジイツと二人を見てゐた。

『あら、逃げますわ、何うしたんでせうね。』

『なアに人なれしないのかもしれませんが、僕が抱いてやらう。』
と、そのガイコツの上の白蛇を抱かうとした時、白蛇は、雪子に抱きついた。それと同時に、ガイコツの手から、何か落ちた。

『あら、守ちやん、吃驚するわ。』

と、雪子は蛇を懐中に入れて、可愛くつて／＼堪らないと云ふ様に頬づりをした。

蛇も嬉しさに、紅い舌を出して、ペロ／＼と雪子の頬をなめ

たので、

『あれッ厭よ。』

と、氣味悪い思ひはしたものの、これがこの家の守護の神でありまた自分達の危難のある時には救つてくれるものと解つても居るし、その上、白くつて美しい蛇だから、普通なら、蛇を見てさへ氣絶するのではあるけれど——蛇と聞いた位でも、氣絶したんだもの——何とも思ひやしなかつた。

さて太郎と雪子は、喜び勇んで歸らうとする時、白蛇はスルスルと雪子の懐中から出たので、

『あら、出ちや駄目よ、一緒に私達のお部屋へ歸るのぢやないの

さア大人しく歸りませうね、守ちゃん。」

と、また抱かうとすると、白蛇は、ガイコツの落した何かの包の上にとグロをまいて、動かうともしなかつた。

「おや、今まで氣がつかなかつたが、こりやガイコツの手にあつたものだが、憚うして蛇がこの包から放れぬ處を見ると、こりや、この中に何か這入つてるのでせう。」

と、太郎はその包をとらうとすると、白蛇は大人しくごいて、そつと雪子の懐中へ這入つた。

「あら、守ちゃんは大人しく懐中へ這入つたわ、さうすると、こりやその包に何か大切なものが這入つてゐる事を私達に知らせた

んですわ。」

と、雪子もさう思つた。

「僕もさう思ひましたよ。」

と、太郎はその包みを取り上げて、

「兎に角、開いて見ませう。」

と、太郎は電燈の光りで開いて見ると、何千圓としれぬ金の束が出た。

「あッ金だ。」

「おや、まア。」

と、二人は一時にビツクリした眼をした。

金には驚いた譯ぢやないが、こんな處に金があると云ふのが一人には不可思議に思はれたのであつた。

『おう、こゝにこんな紙片が這入つてますよ。』

と、太郎が金束のなかへ、小さい紙片れを出した。

『早く読んで聞かして下さいな。』

と、雪子は懐中電燈をさし向けた。

この金は血吹雪水晶を深しに行く旅費なり、これにて充分なり、探しに行く時は誰にも絶対秘密にて出發すべし。

卓也

と、認めてあつた。

『なる程、伯父さんは萬事に注意深いんだなア。』

『ぢや誰にも秘密つて、伯母さんにも云はれないんですわね。』

『そりやさうでせうとも、遺言の時は貴女と僕さうだつたもの……さア歸らう。』

『何時でせうね。』

『さア。』

と、太郎は懐中時計を出して見て、

『おやもう三時ですよ。』

『まア、夜中の三時よ、屹度、伯母さんは心配して被在るわ。』

「早く、歸りませうよ。」

「寫眞を持つて行つて下さいよ、僕は金を持つて行くから。」

「え、よくつてよ。」

と、二人はそれごとく持ち物をして、喜び勇んで、

「本當に守ちやんのお蔭よ。」

と、雪子は今更の様に頬すりをした。

「なる程、守護の神と云ふが本當ですね。」

「こりや可愛がつて、大切にしなくつちやならないね。」

「え、だから私ね、こう思つてるのよ。」

「どんな事……」

と、太郎は笑ひ乍ら聞いた。

「私は守ちやんの母さんよ。」

「そして僕は……」

と、やつぱり太郎は笑つてゐた。

「お父様よ。」

「は、は、は、まるで赤ちやんの様な事を云つてるね。」

「でも、守ちやんは、太郎さんと私の赤ん坊よ。」

と、雪子は無邪氣な事を云つてた。

「ちや、雪ちやんは、僕の奥さんなんだね。」

「え、さうよ。」

とは云つたものゝ、雪子の頬は紅かつた。

彼女は十七の娘である、太郎は十九の青年である。こんな事を男から申談とは云へ、云はれて見れば羞しいのは當り前である、しかも誰も居ない地下室でのなればなほさらであつた。

けれど雪子はとうから、太郎を未來の自分の良人と心に確く定めて居つたのであつた。

『私ね、今まで云はなかつたけれど、私ね……』

と、雪子はモヂ／＼してゐた。

『何うしたの。』

と、太郎は怪しくおどる胸を抑えて、聞き直した。

『話しても太郎さんに笑はれるんですもの。』

『僕決して笑ひはしませんよ。』

『でも嫌はれると不可いから、よしませうね。』

『話しかけてよすのは氣持ちが悪いから、話して御覽なさいよ。』

『でも羞しいんですもの。』

『だつて雪さんと、僕どそれに守ちやんだけぢやないか。』

『ぢや話すわ、その代り笑つちや厭よ。』

『決して笑ひやしません。』

『私ね……あの一生太郎さんと一緒に暮したいのよ。』

『本當。』

と、太郎は雪子を、よせて、

「ぼ、僕もさう思つてゐたんですよ。」

「ぢや私を思つて居つて下すつて、私を一生可愛いがつて下すつて……。」

「僕の心には變りがありませんよ。」

と、太郎は雪子に熱いく、をした。

雪子は今迄にない幸福な生涯を得た様な、何んとも云えぬ心嬉しい感じを、の刹那に得てからは、ウツトリした心持になつてしまつたのだつた。

「さア歸らう。」

「えゝ。」

と、雪子は夢見る瞳で、太郎を見上げた、そしてその手はいつかは知らぬが堅くく吸ひつけられた様に、縫ひつけられた様に、り合はされてゐた。

二人が鐵の戸を開かうとしても開かなかつた。

「おやッ。」

と、叫んだ太郎は、無理にも押したが、更に動かなかつたので、はつと驚いて、

「アツたッ。」

「何うしたの。」

『戸、戸が開かないッ。』

『きッ。』

と、雪子も吃驚した。

太郎は傍にあつた金棒で、コチあけ様としたが、それこそテコでも開きさうにも思はれなかつたので、流石の太郎も驚いて、金棒を投げ出して、

『しまった、感づかれたなッ。』

『誰が閉めたんでせうねえ。』

『乾度、西澤親子の奴等にちがひがない。』

と、地團駄ふんでも、おつゝかない。

『太郎さん、何うしたらいゝでせうね。』

『さア僕も困つた。』

『この儘ですと、私達は、し、死んでしまふんですわねえ。』

『そうなると、伯父さんの遺言を果たせないので、残念だなア。』

『寶の山に入り乍ら、手を空しくして歸るとはこの事ですわ。』

『空しく歸る處か、我々は餓死せねばならんだな、残念だ、残念だ。』

と、太郎は、口惜しげに天井を仰いだが、何うにかならうと、金棒を振り上げて、力一杯、根かざりに鐵の戸を叩きつけたが、クワンクワンと激しい反響が、室一杯をおそふて、目まひがして仆れ

はすれ、何うして破れさうにも思はれない。

「あゝ、駄目だ。」

と、太郎は金棒を投げ出して、グツタリと鐵の戸に凭れて、
吐息を洩した。

「太郎さん、何うしませう。」

と、雪子はシク／＼と泣いて、太郎の胸に凭れかゝつた。白蛇の
守が懐中から出たのも知らないで……

藻抜きの殻

——真夜中の電話の鈴——

——ニタリと凄く笑ひ——

安二は何處から歸つて來たのか、自分の家へ歸ると、ニタリと
笑ひ乍ら、父の健一の前に來て、

「お父さん、唯今。」

「大層、今夜はおそいちやないか。何うしたんだね。」

「例の一件で奔走してゐたんですよ。」

「すると、秀原の祕密の一件か。」

「さうですよ。」

「何か甘い事があつたのかね。」

「例の邪那者を片づけて來たんですよ。」

「ふん、すると太郎と雪子を殺したのか。」

「シツ。」

ど、四邊に注意して、

「殺したやうな、殺さない様なものですよ。」

「それぢや話しが可笑しいぢやないか。」

「處が、可笑しくもないんですよ。」

ど、安二はニヤ／＼笑ひ乍ら、

「實はね、今夜、二人の監視をしてゐると、秀原の書齋に這入つたから、忍んで様子を見て居るど、何かしきりに探して居りましたよ。」

「そりや屹度地圖を探してゐたんぢやないか。」

「私もさう思つたんですよ、すると、太郎の奴が何うしたハツミか本を出さうとする拍子に、その書棚が不思議にもスーと音もなく、動いたんですよ。」

「へえ。」

ど、健一も話しに驚いて、膝をすゝめた。

「すると、その下が、地下室へ行く階段になつて居つたんですよ。」

よ。』

『なる程。』

『こりや多分秀原が思はくがあつて、秘密があつて拵へて置たものに違ひがありませんよ。』

『あいつのする事だもの、そんな事は朝飯前なんだよ、それから何うした。』

『太郎の奴が不審がつて、いろ／＼調べてゐましたが、傍にボタンのあるのを見つけて、それを押すともとの通りに書棚が納つたのです。』

『それで太郎や雪子は何うした。』

『それが問題なんですよ。』

『吃驚したゝらう。』

『二人の奴は大膽にも、その地下へ下りて行つたから、私も後を尾けて行つたわけです。』

は、アすると、太郎や雪子を地下室に幽閉した怪しい男は安二であつたか。

『すると二人は地下室へ這入つたから、これ幸ひと、そつと鐵の戸を閉めて、貫も確くかけて來たんですよ、お父さん、もう邪魔者はないから、大丈夫ですよ、これから、踊らうが跳ねやうが、お勝手次第と云ふわけですよ。』

「成程な。」

と、感心して、

「しかし、本人を殺してしまつては大事の地圖を何うするね。」

「それは大丈夫。」

「何うして大丈夫なんだ。」

「まアお聞きなさい。地下室へ幽閉して置けば、餓死する事は、當然の事でせう。」

「そりやさうだ一週間も経つたら、死んで居るだらうよ、併しそ
うなると地圖の所有が不明になるぢやないか。」

「處が、もし彼等が持つて居るとすれば、一週間後そつと、誰に

も知れぬ様にして私が行つて持つて來ます、またもつて居なければ邪魔者が
ないから、未亡人なんか何うにでもなりますからね、安心してゆつくりと地圖を
探し出して、そして世界唯一品の血吹雪水晶を安々と手に入れると云ふまア
魂膽ですよ。」

「成程、それはよい考へだな。」

と、云つてる處へ、激しい鈴の音。

「は、ア、いよ／＼うろたいたな。」

と、安二は、ニヤ／＼笑つた。

「何か解があるのか。」

「云はずとした、太郎と雪子の行衛不明に未亡人が慌て、私

達を呼びよせる電話ですよ。』

『成程。』

と、健一が感心してゐると、尙も激しい電話の鈴の音の響き、

『うるさいな。』

と、安二は電話口に立つた。

『はア〜、奥さんですか。』

『安二さんですか。』

『さうです。』

『大變な事が起きましたから、夜中恐れ入りますがお父さんと御一緒に、至急おいで下さいませんか。』

『へえ、大變な事と云つて、どんな事で御座いますか。』

と、さも驚いたらしい口吻り、

『詳しい話しはおいでの上で申し上げますが、實は太郎と雪子が急に居なくなつたので御座いますよ。』

『えッ、それは一大事の事で御座いますな。』

『ですから、今警察へ電話をかけ様かと、思つて居るんですよ。』

『それは私達がお伺ひした後でよいでせう。』

と、云つたのは、もしや刑事なんかに、書棚を感づかれては、自分達の運命にさはりがあると思つたからであつた。

『ですから、御相談をお願いしたいんで御座いますから、甚だ恐

れ入りますが、大至急おいでを願はれませんでせうか。』
『よろしう御座います、何はともあれ、直ぐ様自動車でお伺ひします。』

と、その儘電話を切ると、安二は健一の前に来て、

『お父さん、出かけませう。』

『出かけたつて、こつちのやつた仕事なんだから、何うにも手の下せ様がないぢやないか。』

『處がですな、今が大事な時なんですから、白ばくれて、未亡人のお氣に入る様にして置いて、お茶を濁して一週間を経たせるんですね。』

『それもさうだな、けれど、未亡人には何んと話したらいゝんだね。』

『それは萬事、私の胸にありますから、唯驚いた顔をして被在れば、それで結構なんですよ。』

『さうか、それぢや、行かう。』

と、二人は自動車に乗つて、秀原家へ馳けつけた。

未亡人は待ちかねてゐたので、

『さア何うぞ。』

と、奥の間に案内した。

『早速ですが、飛んだ事が出来ましたな。』

「私も困つて居るんですよ、良人には死なれ、後相續をする二人は行衛不明、こう不幸事ばかりつづくので私は何うしてよいかと思つてゐますよ。」

「まつたくですな。」

ど、安二は尤もらしく、腕なぞを拱いた。

「こりや若い者にありがちの事をやつたんぢやありませんか。」

ど、突然健一が口を出した。

「若い者にありがちと云ふと、ごんな事なんです。」

「早く云へばですね、太郎さんと雪子さんと夫婦になるつもりで馳落ちをなすつたんぢやありませんか。」

「真逆、ほゝゝゝ。」

ど、未亡人は笑ひ出した。

「併し笑ひ事ぢやありませんよ、この道ばかりは……と云ひますからね。」

「けれど、本人同志は末に夫婦になると云ふ事は、云ひ聞かせはしませんけれど、それとなく云ひ渡してあるのですから、何も馳落ちなぞをしなくつてもよいのですよ、それに今試験中でもありますから、そんな事はしまいと思つてます、それに、馳け落ちをするなら、自分のものを持つて行くとか、金を持つて行くとかしさうなものです、それもしてゐませんし、女中達に聞いても、

二人とも出かけないこの事ですよ、それに下駄もちやんとありま
すから、不思議ですよ、だから、家の何處かに居るんぢやないか
と、家中して先刻から探して居りますよ、もうかれこれ三時近く
ですもの、何が何んでも歸つて來さうなものです、それらしい
事もありますので、ホト／＼困るのです、何うしたものでせう
警察へお願いしてみませうか。』
と、未亡人はオロ／＼聲だつた。

『まアお待ちなさい、何もさう慌てたからとて、また警察へお願
ひなすつたとて、お歸りの時が來ればお歸りになりますし、解
時が來れば解りますよ。』

と、安二は悠々したものだ。

未亡人は腹立しげに、

『でも何時歸つて來るか解らないものをさうペン／＼と待つて居
られませんよ。』

『そこですよ、つまり、警察なんかへ願ひ出してはすな、萬一、
馳け落ちだすとすると、秀原家の家名にかゝはりもし、また耻にも
なります、まア／＼一週間のうちお待ちなさい、必ず私が探し
ませう。』

『さうですか、ぢや何事も萬事貴方々にお任せしますから、何卒
よろしき様にお願ひします。』

「それぢや今夜はおそいからこれでお暇しますが、まあ安心して一週間の間お待ちなすつて下さい、屹度、奥さんのお喜びなさる様な吉報を持って來ます。」

「それを聞いて安心しました。」

ど、玄關へ送り出して、

『夜中、飛んだ御迷惑をかけて済みませんでした。』

『いゝえ、何ういたしました……では、奥さん、おやすみなさい。』

ど、會釋して、西澤親子は自働車で家へ歸つたが、その道すがら自働車の中でのコソコソ話し。

『なア安二、一週間とは云ふが、それはマダルツコイ話した、明晩邊りは弱つてゐるだらうから、誰にも知れぬ様にして、地下室へ行つて、一發のもとに片づけてしまつては何うだ、地圖があつてもなくつても仕事が早手廻しだよ、第一そんな呑氣な事を云つて、自分の身がいつ危くなるぬとも限らぬから、出来るだけ早く、大仕事にかゝる準備をやらうぢやないか、早く此方に感づかれぬうちに、日本の地を離れた方が安心だせ。』

『それもさうですな、ぢや、明日は一つ荒仕事をやりませうか。』
『何うかさうしてくれ。』

ど、悪支配人親子、西澤等は自働車の中で、こんな恐しいたくら

みややつてやうとは、運轉手はおろか、未亡人も太郎も雪子も知らなかつたのであつた。

その翌夜であつた。

例の書齋へ忍び込んだ安二は、四邊に注意して、ソツと書棚に近づいた。

そして例のボタンを力づくよく押した。

すると書棚は例によつて、スーと音もなく開いたので、安二は片手に懐中電燈、片手にピストルを持つて、静かに階段を下つて

鐵戸の室の前に来た。

そして暫くは戸に耳をあて、中の物音を聞かうとしたが、シンカーンとして、何の音だにせず、唯自分の息のみかすかに聞きとれる程の静かさだつた。

『は、ア、いよ／＼へタパツタな。』

と、ニヤリと凄く笑つて、ソツと鐵戸を開けると同時に、ピストルをさし向け乍ら、電燈を照して見て、

『あッ。』

と、叫んだ。

それもその筈、二人が居る筈なのに、太郎も雪子の姿も形も見

えない。

『しまった、逃したかなア。』

と、安二は地團駄を踏んで口惜しがつた。

地圖の行方

——印度へ出發の仕度——

——大きな穴だと叫ぶ——

『何處からも逃げ出せないんだがなア。』

と、安二は電燈の光りで、室の内外をよく調べて見たが、突然、

『おやッ。』

と、叫んで何か白い紙片の様なものを拾ひ上げた。

それを読んで見ると、

我々は伯父の遺言によりその意志を果す爲めに、
暫くの間此の日本の地を去るものなり。

成就なさる間は、如何なる事ありとも、歸宅
せざるべし。

死を期しての事なれば、我等の生存は心に留め
ざる様に願ひ度し

事情ありて、誰にも面會せずの旅立てるを謝す

太郎

雪子

と、萬年筆の走り書き、

『シッ、しまつた。』

と、安二は地團駄踏んだが、もはや後の祭りであつた。

*

*

*

*

*

*

さて 太郎と雪子は何うしてこの地下室を抜け出たのであらうか？

それは彼等に聞いて見ねば解らぬ事である。

安二は何うして、この室を抜け出た事かど、四邊りをキヨロキ

見廻したが、氣があせつて居つて、壁に注意しなかつた。

汚ないぼろくした壁に薄く四角の跡のある事に氣がつかかなかつたのは太郎や雪子二人にとつて、幸福と云はねばならぬのであらうか。

けれど安二とて悪漢だけに、大學を出てゐるだけに、悪智慧は充分にあつた。

「こりや大變だ、彼奴等に逃げられては、血吹雪水晶は奪はれてしまふ。』

と、慌て、書齋に駆け上り、書棚を元の通りにする事を忘れてすぐ様、秀原家を抜け出て、自動車をつとばして、我が家に轉

げ込んだ。

「た、大變ですよ。」

と、安二は息を切つてゐた。

「ど、どうした。」

と、父の健一はおどくした態度で、近寄つて來た。

「太郎や雪子は何うした。」

「その事です。」

と、安二は健一のついでに出したお茶を一息に呑みほして、

「に、逃げましたよ。」

「えッ逃げたつて？」

と、健一の顔色はサツと變つた。

「ピストルを向け乍ら、這入つて行きましたら、もぬけのからでした。」

「そして、その地下室は、逃げ口でもあるのか。」

「何うして、何うして、逃げ出す處か、一步だつて鐵戸から外へは出られないんですよ。」

「それが何うして、逃げたのだらうな。」

「私もよく見ましたけれど、どこつて抜け穴もないんです。」

「鐵戸を破つて出たんぢやないかな。」

「い、や、假令、鐵戸を破つたとて、あの書棚が盤石の様になつ

てゐるのに、何うして出られるものですか、それに、鐵戸は貫をかけた儘になつて居りましたもの。』

『何をしても困つたものだなア。』

『そんな事を云つてゐる場合ぢやありませんよ、私達も早く、この地を出發せねば、血吹雪水晶は、彼奴等に奪はれてしまひますよ。』

『すると、二人は地圖を持つてゐるんだな。』

『さア、それは何うかしれませんよ。』

『ぢや、そんなに慌てる事はないぢやないが、何しろ地圖もなくつて、印度の無人島へ行つた處が何うにもならんぢやないか。』

『それにも一理はありますが、そんな事を云つてゐる場合ぢやありませんよ。』

と、安二はイラ／＼した心持ちで、急ぎ立てた。

『何うして、お前に似合す慌てるんだらう。』

『それは恚うですよ、地圖なんか探して居つて、私達の運命を縮める様なものですからさ。』

『へえ。』

と、健一は不可解な顔をした。

『考へて御覽なさいな、未亡人に約束した一週間の期日は一兩日後ぢやありませんか、それに一週間経つても子供の行衛が解りま

せんと云ふ事になれば、彼女は慌て、警視廳へ依頼するでせう、すると刑事がふみ込みや、私達が注意してもボロを出さぬとも限りませんからね。」

「それはさうだな。」

「その上ヒョッコリ何處からか子供が歸つて来て見なさい、第一私達は不審がられます。」

と、云ひ乍ら、何か思ひ出した様に、

「おツさうだつた。」

と、紙片を出して、

「それに、地下室にこの紙片が落ちてをりましたがこの文句によ

ると、太郎や雪子は地圖を手に入れたらしいですよ。」
と、渡した。

「健一は、その紙片の文句を読んで、

「こりやグヅ／＼してゐられぬ、伯父の遺言、意志を果たす爲めに、この地を去ると云ふからには、必ず地圖が手に這入つたから印度へ出發したに違えないな。」

と、立ち上つたが、フツと思ひ出して、

「しかし可笑しいな。」

「何がです。」

「何がつて、お前、旅費もなくつて、何うして印度へ行くんだら

う。』

『さア、それについては、太郎は智者です、これには誰にも會はずに出發するとはあるが、ソツと伯母を呼び出して、旅費を貰つて行くにちがひがありませんよ。』

『けれど、伯母にあはぬとあるのに、何うしてそんな事があるものか。』

と、健一はなかく安二の言葉を信じない。

『だから、お父さんは困ると云ふんです、こりや事によると私達の事を感ずいて、我々を恐れて欺く手段に書いて置いたものと見るより他にありませんよ。』

『すると、伯母に會へば、尙更ら油をかけるだらうな。』

『そりや理論ですよ、地下室に幽閉された事を云へば、あの伯母は私達を怪しみますよ。』

『さうだ、ごつち道、俺達の身は危くなつて来たぞ。』

『だから、今夜これから仕度にかゝつて、明日こつそりと、印度へ出發させようよ。』

『でも地圖がないぢやないか。』

『それは途中で、先廻りしてゐて、二人の子供から奪ふが早道ですよ。もし逢はなかつたら、三角山とあるからには、そういくつもありませんから、それを目的にすればよいし、あつた處で、

「一々調べるに手間の取れる事でもありませんまい。」

「成程、さうだ。」

と、二人は急にこそくしと仕度をしはじめた。

* * * * *

その翌朝であつた。

慌たしく未亡人の室へ、飛び込んで来たものがある。

それはこの家の忠僕の平助だつた。

「た、大變ですよ、奥様。」

と、平助はうろくしてゐた。

「大變つて何うしたの。」

「旦那様の書齋に大きな穴が開いてゐます。」

「えッ大きな穴だつて。」

と、未亡人も驚いて立ち上つた。

「私が今朝、何の氣なしに、書齋の前を通りますと、いつも閉めてある扉があいてゐますから、中へ這入りましたら、いろいろの物を取り亂してあつて、その上、書棚が妙な處へ動いて行つて、その跡に大きな穴が開いてありますよ。」

「そりや大變。」

と、未亡人も蒼くなつて、書齋へかけつけた。

書齋は安二が慌て、ボタンを押さなかつた爲めに地下室が明
き切りになつてゐたのであつた。

「あれまア、これは……」

と、唯驚くばかりであつた。

「何うしたもんでせう。」

「盗人の仕業ぢやありませんか。」

「警察へとつけては何うでせう。」

と、下女下男はオロ／＼しなから、未亡人の身の廻りに集つた。

「兎に角、西澤を呼んで相談をさせよう。」

と、あくまで悪支配人とは知らずに、信用してゐる西澤に電話を

かけたが、今日は珍らしくも通じないので、激しくなほもならし
つゝけた。

探偵の眼光

——急用のはりふだとは——

——刑事は一同で大活動——

「何うしたんだらう。」

と、未亡人はヂリ／＼して、尙も激しく電話の鈴をならしたが、
更に出て来る様手がないので、

「可笑しい事もあるものだ。」

ど、慌て、女中を呼んだ。

「お召しで御座いますか。」

「早く自動車の仕度をしておくれ。」

「はい。」

「急いでだよ。」

ど、未亡人もイラ／＼し乍ら、外行の仕度にとりかゝつた。

女中も驚いて、急いで運轉手部屋に飛んで来て、

「岡田さん、奥さんのお出かけですよ。」

「何處へ。」

「何處だつていゝぢやありませんか、大層急いで被在いますから

大急ぎで仕度をして下さいよ。」

「そんなに急がせたつて、まだガソリンも入れなくつちやならぬのだよ。」

そんな呑氣な事を云つてる場合ぢやありませんよ。」

「だつて、お花さん、ガソリンを入れないで、自動車が走るものか。」

「何故、昨夜のうちに、仕度をして置かなかつたのですよ。」

「でも今日お出かけたとは思はないぢやないか。」

「だつて、何時お出ましても間に合ふ様にして置くのが運轉手の役目ぢやない事。」

「運轉手、運轉手つて馬鹿にしやがるな、お前は主人ぢやあるまいし、大きな事を吐しやがるな。」

「大きな事を云はないたつて、御主人の命令ですよ。」

「主人、主人つて、かさに着やがるな、お多福奴。」

「あら、何うせお多福よ、でも誰かさんは私を口説いて肱鐵砲を喰つたぢやないか。」

「そりやお門ちがひぢや。」

「ヘン、そんな事がよく云へたものだ、お前ぢやなければ、夜も晝も明けないと云つた癖に……」

と、争つてゐる處へ、平助が慌て、出て來た。

「自動車の仕度は出來たのかね。」

「何アにこれからですよ。」

「そんな呑氣な事を云つてゐては困るぢやないか、もう奥さんのお仕度は出來て、もう自動車は出來たかつて御催促だ。」

「奥様の方はよくつたつて私の方はこれからですよ。」

「何をしてゐたんだ。」

「岡田さんは、私を擲擄つてゐたんですよ。」

と、女中のお花は味方が出來たとばかりに、平助に油をかけた。

「申談ぢやない、何日もとちがつて、今日は大變な事があつて、奥さんがお急ぎなんぢやないか、そんなにブザケてゐる場合ぢや

ないよ。』

『私はフザケはしませんけれど、お花の奴が……』

『いゝえ、岡田さんが……』

『なアにお花の奴が……』

『お花くんと、馬鹿にしなくつてもいゝですよ、お前さんの女房
ぢやあるまいし、スットンくチキ奴。』

『何いお多福。』

『南瓜。』

『ヒョットコ。』

と、二人が角づき合ふを、老人の忠僕平助が、慌てゝとめて、

『これくゝ何を云ひ合つてる、お花もお花だ、今と云ふ場合に、
そんな論判をすると云ふ奴があるか。』

『でも……』

『でもぢやないよ。』

『態見やがれ。』

と、岡田が凱歌を上げると、

『これくゝお前も不可ないよ。』

『へえくゝ。』

と、シブく、岡田はガソリンを入れはじめた。
處へ未亡人は待ち切れずに出て来て、

「何うしたの、まだ、仕度が出来ないんですか。」

「この通り若い者は寄り合ふと、喧嘩ばかりして、困るんですよ。」

「いつもと違ふんですから今日はそんな事はしないで、早く仕度をしてお下さいよ。」

と、優しく云はれて、岡田は恐縮して、早速自動車を引き出した。

お蔭で、他の二人までが、針を含んだ様なお叱言を頂戴してしまつた譯であつた。

「さア、お待ち遠様。」

と、云はれて、未亡人は早速に自動車で乗り込んで、

「何うか後を氣をつけて下さいよ。」

「はい畏こまりました。」

と、平助もお花も叮嚀に頭を下げた。

「何處へおいでになりますよ。」

と、岡田に云はれて、

「西澤の家まで、大急ぎですよ。」

「はい。」

と、岡田は心得顔に自動車を走らせた。

「行つて被來いませ。」

ど、云ふ聲を後に聞き流して……。

岡田は急速度を出して、自動車を走らせて、暫くして、西澤の家の前に自動車をビタリと止めた。

未亡人は、扉を開けるのもモドカしげに、自動車から下りて、ツカ／＼と門前に進んだが、

『おや。』

ど、叫んだ。

『何うしました。』

ど、岡田も馳けよつて来た。

『何時も開いてゐる門が閉まつてゐますよ。』

『さうですな、でも潜り戸は開くでせう。』

ど、岡田は潜り戸を押すと、ギーンと云ふ音と共に、難なく開いた

『奥様、開きましたよ。』

『おや、さうですか。』

ど、未亡人は潜り戸から這入つて玄間へ来て見ると、戸がしまつてゐて、

急用あり、外國へ暫く旅行す。

歸朝は未定なり。

安 健

二 一

ど、親子二人の名で、貼ふだがしてあつた。

「呀ッ。」

ど、未亡人は立ち竦んだ。

「急用つて、何うしたんだらう。」

ど、云つてる處へ、岡田もノコノコ這入つて来て、

「おや、戸が閉つてゐますね、西澤さんには珍らしい朝寢坊ですな。」

「それがさうぢやないよ、急用があつて、外國へ行つたのですとさ、それ御覽、こゝに書いてあるぢやないか。」

岡田も未亡人に云はれて、

「な―る程、こりや可笑しいな、外國へ行くなら、何んとか云つて行きさうなものだになア。」

ど、腕を組んでゐたが、ボンと膝を叩いて、

「奥さん、こりや變ですせ。」

「何うして。」

「考へて御覽なさいましよ、昨夜まで何んの變りもなく居つたのが、急に一言の挨拶もなく、外國へ行くなんて、こりや事によるどお邸の大穴ど何か關係がある事ですよ。」

「あツさう云へば、さうかもしれないね、何しろ、今日になつて書齋にあんな穴が出来たり、その上に西澤等が居ない處を見ると

こりや變だね。」

「それに、坊ちゃん、お嬢さんの行衛不明も事によると、こいつらに何かわけがあるんでせうよ。」

「何うしたもんだらう。」

と、未亡人は泣き出した様な心持になつた。

「この上はグズくしてゐないで、この儘警視廳へ馳けつけるんですね。」

「もうそれより道はないでせう。」

と、太い吐息をして、

「兎に角、警視廳へ自働車を走らせてくれ。」

と、未亡人は蒼くなつて、自働車に乗つた。

岡田もお家の一大事とて、お花と串談を云ひ合つた事など忘れて、全速力で警視廳へ馳けつけた。

未亡人は受附へ来て、

「刑事課へ参りたいのですが。」

と、云ふと、受附の巡査が叮嚀に、石段を上つて二階の刑事課へ案内した。

扉を押して中へ這入ると、機敏さうな刑事が四五名、何か事件の話しをし合つてゐた。

處へ扉を押して人が這入つて來たので、一同はピッタリ話しを

よして、一齊に入口の方を見ると、秀原未亡人が蒼くなつて這入つて来たので、

『さては何事か大事件があつたのだな。』
と、思つた。

『お願いがありました……』

と、つかくと未亡人は進んだ。

上品な奥さんの風に一同は町重に迎えた。刑部長は椅子をすゝめて、

『はア、何んな事ですか。』
と、優しく尋ねた。

『實は一週間前に突然二人の子供が行衛不明になつて、その上亡き良人の書齋の書棚が妙な處へ動いてゐて、その下に大きな穴が明いてゐるんです。』

『ほう、そりや近頃でない怪事件ですな。』

『そればかりぢやありません、今日も唯今、突然、家の支配人親子が居なくなつたのです。』

『はア。』

と、刑事長は小首をかしげて聞いた。
他の刑事も聞きもらさじと、耳を聳立て、聞いてゐた。

『そして、その支配人親子も行衛不明なんですかね。』

と、刑事長は念を押した。

「いゝえ、それは急用が出来たとて、今朝突然出發したらしいのです。」

「なる程、して、貴女のお宅は。」

「秀原卓也で御座います。」

「え、あの名高い秀原さんの……あゝさうですか、兎に角、一度現場を拜見ませう。」

と、一同の刑事は、急にドヤ〜と立ち上つた。

あつと叫んで

——電気仕掛の落し穴——

——水はだん〜増して——

刑事一同は未亡人と共に自働車に乗つて、我が家へと歸つて來たが、途中で敏腕家と云はれる、青年探偵の中田猛は、刑事長に向つて、

「私は、ここで皆さんとお別れして、支配人の宅を先に調べて、後から秀原さんの方へお伺ひしますが、如何なものでせう。」

「よからう、君の事だから、何か考へのある事だらうから、一つ

氣儘に調べてくれ給へ。』

と、刑事長は心よく承知をしてくれたので、

『奥さん、支配人の名前は何と云ひます。』

と、たづねた。

『親の方は健一と云ひますし、悴の方は安二と云ひます。』

『處は？』

『麴町 元園 町一ノ十二です。』

『あッ、さうですか、それぢや、私はこれで失禮します。』

と、立ち上つて、

『いづれ後刻お目にかゝります。』

と、自働車を留めさせて、中田探偵は降りた。

『中田君、しつかり頼むよ。』

と、探偵長は窓から首を出して、恚う云つた。

『承知しました。それぢや諸君、失禮します。』

と、お世辭を云つて、彼はノソノと歩き出した。

自働車は、中田を置いて、全速力で秀原家の方へ走り去つた。

その後を見送つた中田は、

『何しろ、有名な秀原家の怪事件だからな、こゝで一奮發しなま

ア、名を上げる時がないぞ。』

と、つぶやき乍ら、電車に飛びのつた。

電車の中でも絶えず何か考へてゐたが、

「麴町六丁目」

と云ふ車掌の聲に、呀つと氣がついて、彼は電車を飛び下りた。

そして、元園町の西澤の宅へ來て見ると、成程門が閉つてゐる

「はゝア、こゝだな。」

と、かねて潜り戸は開くと云ふ事を聞いてゐたから、それを開けて、中へ這入らうとしたが――

不思議！……不思議！……實に不可思議だ、戸はなかく開かない。

「おや、可笑しいぞ、あかない事はない筈だが。」

と、無理にも開けやうとしたが開かない。

「おや、こりやますく可笑しい。」

と、暫く考へてゐたが、

「何ッ糞ッ。」

と、彼は血氣にまかせて、塀をヒラリと飛び越して中へ這入るとシーンとした静けさだ。

まだ眞晝なのに、雨戸を閉め切つてある。

「はゝア、いよく怪しいぞ。」

と、玄關へ來て見たが、前の通りなかく開かない。

そこで裏手へ廻つて見ると、中からコト／＼と音がする。

『はてな。』

と、注意深い中田探偵は、ソツと戸に耳をあて、中の様子を覗ふと、確かに人が居るらしい。

『こりや、外國へ行つたなどは嘘の事だ、確かに家にかくれてゐるに違ひない。』

と、彼は、力一杯に兩戸を蹴破つて、中へ突入した。

處が、やつぱり中はシーンとしてゐる。

『おや……』

と思つた中田探偵は、尙も注意深く、奥へ踏み込むと、書齋らしい室の前に出た。

注意の爲めに鍵の穴から、中を覗いて見ると、一人の年若い女が、何かしきりに、地圖の様なものを見ては、お茶を呑んだり、菓子を喰つたりしてゐる。

『へえ……こりや可笑しい。』

と、中田探偵はますます變に思つたが、

『此奴ツ怪しい女だ。』

と、ばかりに、突然、扉を開けて、ツカ／＼と中へ這入つた。その音に驚いて、

『あれ……』

と、女はへたく／＼と坐り込んだ。

中田はピストルを出して、

『神妙にしろ。』

と、云ひ渡すと、女は菓子を半分啣えて俵で、口をバク／＼させて両手を合せた。

『命をどらうとは云はぬから、聞く事を隠さずに話せ。』

と睨みつけると、女は唯口をバク／＼させるばかりだった。

『なんだ菓子を喰つてゐるのか、早く喰つて云へ。』

と、云はれて、女は眼を白黒させて、やつとそれを飲み下して、胸を撫で下した。

『主人たちは何うした。』

『は、はい、あの存じません。』

『存じませぬと云ふ事があるものか、云はぬと命がないぞ。』

『いゝえ、まつたく存じませぬのです。』

『そして、家を出たのは何時頃だ。』

『今朝早くお出かけになりました。』

『何處へ行くと云つた。』

『それは存じませぬ。』

『聞かなかつたのか。』

『聞きました。』

『何んと云つたのだ。』

「外國へ行くど仰有いました。」

「そして、いつ歸ると云つた。」

「さア、その事については唯、氣の向いた時に歸るが、いつ歸るか解らぬと申しました。」

「そして、お前は何うして、主人の居ないこの家に居るんだ。」

「お歸りまでお留守居をして居りますので……」

「唯一人か。」

「いゝえ、コツクさんと、婆やさんと三人きりです。」

「そしてその二人は何處へ行つた。」

「遊びに行きました。」

「ふん、呑氣な奴等だな。」

「でも、お給金は二年分、前に頂きましたし、歸るまでは何をしてもいゝから、留守居をしてゐるとの事で御座いましたから……」

「そして、何故、兩戸を閉めたり門を閉めたりして置くのだ。」

「人様がおいでになるのがうるさいからで御座います。」

「併し、用のある人が來んとも限らんのに、さう云ふ事をするど云ふのは怪しいぞ。」

「そんなら、早速、兩戸も門も開けますから、御かんべんを願ひます。」

ど、女はへこくと頭を下げた。

『その地圖は何んだ見せろ。』

『いえ、何んでもないのですよ、普通の地圖ですよ。』

ど、慌て、隠さうとしたので、こいつ怪しいと。

『何んでもいゝから、見せろ。』

ど、近かよつた。

『いゝえ、何んでもないんです。』

ど、慌て、懐中に入れやうとしたので、ますます怪しいと見て、

『神妙にせんと、これだぞ。』

ど、脅かした。

その刹那だつた。

『あッ。』

ど、中田探偵の姿は見えなくなつた。

ど、同時に床に畳一畳位の穴があいた。

ど、ツカ／＼と扉を開けて這入つて来たものがある。

『おや、長さんかい。』

『危ねえ處だつたな。』

ど、コック姿をした、長公と云ふ二十七八の、凄^{すこ}い眼をした男^{をとこ}が

ニヤリと笑つて、

『でもよかつた。』

『お前さんが来てくれてよかつたよ。』

と、女も急に蓮つ葉な口吻りで話しかけた。

「今少し、いや一足おそけりや、大變な事になるんだつたつけないア……」

「本當よ、私、何うなる事かと思つたよ。」

「俺も歸つて来て見ると、裏の戸が開いてゐるから可笑しいと思つたよ。」

「私はまた、お前さんが歸つて来たのかと思つたのに、突然變な奴が飛び込んだものだから、お化けかと思つてビツクリしてしまつたよ。」

と、今更の様に女は胸を撫で下ろした。

「けれどな、俺はこの室の處へ來ると、野郎の聲だらう。失敗つたと思つたが、いざとなりや荒療治と、ジツと様子を見てゐたんだよ。」

「それで例の一件かい。」

「さうだ、お前えの危機一發の處だつたからな、でなア、チヨンとやらかした譯さ。」

「だから、お前さんは可愛いと云ふのさ。」

と、近寄らうとして、危くも穴へ落ちやうとした。

「おつと危ねえ。」

と、とめた。

「もう用がないのだから、早くもとの通り、穴を堀つて、その穴へ這入る様ぢや、ウダツが上らないぢやないか。」

「なる程、ちげえねえ。」

と、長公は柱のボタンを押さうとした。

「ちよいと、長さん、おまちよ。」

「なんだ。」

「何うせ水料理だらう。」

「當り前えよ。喰べ物は満足に料理は出来ねえが、人間の水料理は俺等のお手のものだ。」

「そりや解つてるが、このまゝ料つては面白くないから、今まで

私を苦しめた腹癒せに、チョット責めてやりたいのさ。」

「それもよからう。」

と、長公は頷いた。

『三途の土産話しでも聞かせてやるさ。』

と、長公はニヤ／＼笑つた。

「まつたくだね。」

と、女は穴へのぞき込んで、

「わざ／＼囪にかゝる阿呆者め、お前達みたいなもの、手にかゝる私達かい、今に水雑炊でも喰つて冥送へ行きやがれ。」

と、ニタ／＼笑つて、

『これで引道はすんだよ。』

『さうか、ぢや、そろ／＼水料理にとりかゝらうか』

と、長公はこの室を出やうとして、

『おい、お傳、酒の仕度をして置きねえよ。』

『あいよ。』

と、ニツタリ笑つた。

長公は眼尻を下げて、奥へ姿を消してしまつた。

こんな仕掛けがしてあらうとは知らずに、この落とし穴に落ち込

んだ中田探偵は、

『さア、しまつた。』

と、口惜しがつたが、おつ／＼かない。』

そのうちに上からは非道い事を吐したかと思ふと、スーと音もなく蓋をされてしまつて、眞暗だ。

『こいつは困つた。』

と、探偵は膝まである、なまぬるい水に氣を悪くし何とかして出たいと思つてゐると、突然、上からジャ、／＼と水が落ちて来た

『あッ。』

と、流石の中田探偵も、こゝに進退は極つてしまつたのだ。

水はますます／＼ふえて来て、膝から股へ、腰へと増して来る、何うなる事かと、探偵は岩石の壁にピタツと身をつけて、ジイツと

心をしづめて考へた。水は要捨なく降つて来る。

著者曰く「本號は、頁數に限りがありますから遺憾ながら次は「美人の行衛」と題し發行致しましたから續いて御愛讀を願ひます」

探偵 奇談 血吹雪水晶 (上卷) 終

探偵 奇談 血吹雪水晶 (中卷)

變な四角の壁

——ガタ／＼と骸骨が——
——老探偵は飛び上る——

そんな事が中田探偵の身の上に、起きたとは夢にも知らぬ探偵長や未亡人一同は、自働車を急がせて、秀原の邸宅に着いた。

「お歸り遊ばせ。」

と、出迎えた家婢等に一睨を與へた儘で、一同はドヤ／＼と家へ遣入つた。

「奥さん、穴のあると云ふ室は何處です。」

と、早速探偵長は聞いた。

「こちらで御座います。」

と、未亡人は一同を案内して、卓也の書齋に案内した。

「おゝ、なる程、こりや不思議。」

と、一同は地下へ通ずる書棚の前に集つた。

「こりやなか／＼よく出来てゐますなア。」

と、探偵長は感心して、詳細に四邊を調べたが、不運か、ボタンを見出さなかつた。

他の探偵も注意深く室内を調べた。

「兎に角、下へ行つて見ませう。」

と、探偵長が云ふと、

「私も行つて見ます。」

と、探偵がついてゐると云ふ事に安心して、未亡人も一緒に行く
と云ひ出した。

「おいでなさい、何かまた貴女にお伺ひすることもありませんか

ど、懐中電燈を各自に照して、陰氣臭い、暗いジメ／＼した地下室へと、一同は下りて行つた。

女中や下男、書生達も恐々とその穴を覗き込んだが誰がさはつたか、隠しボタンにさはつたので、書棚がスーと前へ出て、その下り口を蓋してしまつて、もとの通りになつた。

『あッ。』

ど、一同は尻餅をついて、驚いたが、中には書棚がお化けぢやないかと、ヘツピリ腰でウロ／＼するものもあつた。

『さア、大變だ。』

ど、流石は忠僕だけに、平助は大層心配し出して、

『何うしたもんだらう、この儘ぢや、奥様や、刑事の方々が上つて來られないが、何うかして、もとの通りにならないかねえ。』

ど、四邊を見廻した。

『こりや早く、もとの通りにしなければ、皆さんが息がつまつてしんでしまひますよ。』

ど、女中のお花はおろ／＼聲を出した。

『兎に角、皆んなして、カ一杯に押して見やうぢやないか。』

ど、岡田は先頭になつて、書棚を押したが、なか／＼ガタツともしない。

一同は蒼くなつて、

『何うして、こんなになつたらう。』

ど、ワイ／＼騒ぐばかりであつた。

こんな事があらうとは知らない一同は、懐中電燈の光りを頼りに、四邊に注意を拂つて、一歩々々と進んで行つた。

そして鐵戸の地下室の前に來ると、探偵長は四邊を見廻して、

『は、ア、こゝが行きどまりだな。』

ど、鐵戸を押し開けて、中へ這入ると、

『おやツ。』

ど、未亡人は叫んだ。

それは例のガイコツを見たからである。

一同も吃驚したが、流石に職業柄だけに膽が据はつてゐた。

『こりや拵へものですよ。』

ど、云ふ探偵長の聲に一同は安心したが、

『奥さん、貴女はこの地下室のある事を御存じなりましたか。』

ど、探偵長はたづねた。

『いえ、少しもしりません、第一書棚の下にこんな處があらうとは夢にも思つて居りませんでした。』

『すると、こりや亡くなられた御主人が秘密にお拵しらへになつ

たものですか。』

『さア、それはよく存じませんが、主人は何一つ私に隠し立てをして置いたものはありませんでした。』

と、未亡人は不思議相に云つた。

『すると、この室と云ふものは、お棲みになる前にあつたのですね。』

『さアそれも存じませぬ、私の當家へ参ります前に亡くなつた主人は、こゝに棲んで居りましたので御座いましたから。』

『はゝア、するとこりや、ずつと昔にあつたものなんですか。』

これだけの大拵への地下室は祕密に拵へると云つたとて、必ず

人に知れずには置かないものである、それから考へても、それは徳川時代の大名の屋敷跡だつたのかもしれないと、探偵長は考へた。

すると一人の探偵が、壁際から一枚の紙を拾ひ上げた。

『おや、こりや寫真ですせ。』

『どれ〜。』

と、探偵長が取り上げたのを見ると、卓也の若い時代の寫真だつた。

『奥さん、この寫真は見覚えがありますか。』

と、未亡人の前につき出した。

未亡人、不思議に思ひ乍ら、その寫眞を見て、

「これは亡くなつた卓也の若い時分の寫眞ですが、私はこの寫眞を見るのは、今が始めてです。」

『はゝア。』

と、探偵長は小首をかしげたが、

「この寫眞のある處を見ると、御主人はすでにこの地下室は御存じだつたらしいですな、しかしこゝにこの寫眞があると云ふのが不思議だ、こりや何か譯があうさうだ。」

と、首を幾度もヒネツて、

「兎に角、こりや参考の爲めに持つて歸る事にしませう。」

『何うぞ……』

と、未亡人は承知した。

「これでこの室は一先づ引さ上げるとして、坊ちゃんやお嬢さんのお室を拜見しませう。」

『では何うぞこちらへ。』

と、未亡人は先に立つて、書齋へ歸つて來やうとすると、階段の處へ來ると、上は眞暗だ。

「おや、上が塞つてゐますよ。」

「えッ。」

と、一同も驚いた。

『たしかにこゝへ下りる時は、上が開いてゐたのに、こりやいよ
いよ怪しい者がお邸内に居りますよ、我々が地下室へ行つた後で
書棚を蓋にしたんですね、兎に角何とかして出ませう。』
と、探偵長は勇氣を出して、書棚を引き開けやうとしたが。何う
して／＼盤石の様だ。

『おい、諸君、手を貸してくれ給へ。』

と、他の探偵の手を借りて、目白押しの様になつて、

『ヤツサ、ウンサ……』

と、金剛力を出して、引き開けやうとしたが、更に動かない。

『いいつは困つた。』

と、流石の探偵長も困つてしまつた。

一同も當惑の顔をした。

『何うなるんでせう。』

と、二亡人はもう蒼くなつて、ガタ／＼顫を乍ら、生きた心地ぢ
やなかつた。

『心配なさいますな、我々がついてゐますよ。』

と、探偵はつけ元氣をしたものゝ、何うしてよいか、自分にも解
らなくなつた。

すると、他の探偵の一人が、何を考へたのか、

『探偵長、いゝ事がありますよ。』

と、進み出た。

『いゝ事つて何んだね。』

『私の考へには、これだけの大規模の地下室ですから、必ず何處かに抜け道があつて、そこから、外へ出られるだらうと思ひますよ。』

「なる程、それはよい處へ氣がついた。兎に角それを探して見やう、今の場合一刻も早く外へ出なくては駄目だ、まご／＼すると窒息してしまふからね。」

と、云ふ探偵長の發言に、一同は手分けをして、抜け道を探しはじめた。

安井と云ふ老探偵は、何を考へたか、人々とは分れて、もとの地下室へ歸つた。

他の人々は壁をコツ／＼と叩いて、歩き廻つた。

そのうち安井考探偵は、鐵戸の地下室を這入ると、やはり壁を叩きはじめた。

すると、四角に薄くしるしのついた處を、叩いてみると、

『ぼん、ぼん／＼／＼。』

と、洞の様な音がする。

『はてな。』

と、そこを叩いてゐるうちに、夢中になつて、ナイフで四角に堀

りはじめた。

その時、何うしたはづみか、カイコツが、ガタ／＼と仆れて崩れた。

『あッ。』

と、驚いて飛びのいた安井老探偵は、電燈を照して見ると、ガイフツのあつた後に、人間が這ひ込むだけの穴があつた。そこから微かにほの白く、明りがさし込んでゐたので、安井老探偵は思はず。

『ダメたッ。』

と、叫んで、

『探偵長、早く／＼。』

と、呼んだので、

『何うした／＼。』

と、一同は集つて来た。

『ありましたよ、ありましたよ。』

『何が。』

『抜け道らしいものが。』

『どれ／＼。』

と、近よつて見ると、成程、外へ通じてゐるらしい穴なので、一同は吻つとして、

「サア、一刻も早く、ここから外へ出やう。」
と、探偵長が先になつて、這ひ出やうとすると、安井老探偵は慌
てゝとめて、

「待つて下さい。」

「何うかしたかね。」

「ここに變なものがありませんよ。」

と、四角の線の引いてある壁に指さした。

妙な白い箱

——開ければ必らず危険——

——骸骨の傍に羽織二枚——

一同は四角の薄い筋の引いてある處へ顔を寄せて見た。

「この筋は何かのしるしでせうよ。」

と、安井老探偵は説明した。

「さうかもしれんね。」

と、偵長は詳細に調べた。

「叩いて御覽なさい、妙な音がしますよ。」

ど、云ふので、探偵長は試みに叩いて見たら、ボン、ボンと音がする。

『こりや中がガラだね。』

『私もさう思つたものですから、ことによると、何か這入つて居るのだらうと考へましたから、くり抜かうと思つて、一生懸命にかゝりました時、何うしたハツマか、私が觸つたものと見えまして、このガイコツが仆れたのです。』

『併し、それが何よりの事だつたね、我々は外へ出られる道だけは得たから、安心して、一つこゝを開けて見やうぢやないか。』
『私もさう思ひます。』

ど、安井探偵が賛成すると、他の探偵も異議はなかつた。

勿論、未亡人とて、どやかく云ふ處はなかつたのである。

そこで、探偵長はじめ一同は、ナイフでその筋をたどつて抜きはじめた。

『何が這入つてるのでせう。』

ど、未亡人は待ち切れないと云ふ風に問ふた。

『さア、何が這入つてゐますか、我々も開けて見ねば解りませんよ。』

ど、尙も一生懸命にやつてるうちに、

『ぼいッ。』

ど、云ふ音と共に、四角に壁は切り抜られた。

そこで、恐る／＼探偵長は電燈をさしむけて見ると、白い箱が出て来た。

「おや、何んだらう。」

ど、取り上げて見ると、

「この箱を開ける時は、血吹雪水晶がなくては、絶対に開く事は出来ぬ、萬一火薬や、化学的薬で破壊して開ける時は、間違ひを生じて、一命にかゝわる事故、充分に注意すべし。卓也、認めてあつた。」

「は、ア、こりや、何か秘密のものに違ひない。」

「血吹雪水晶つて何んです。」

ど、他の探偵が聞いて見た。

「さア僕にも解らんない。」

ど、振り返つた探偵長は、夫亡人に問ふて見た。

「奥さん、血吹雪水晶と云ふものを、御存じで被在いますか。」

「いゝえ、そんなものは名さへ、始めて伺ふ次第で少しも知りません。」

「ふん。」

ど、探偵長は小首をかしげて、

「すると、その水晶と云ふものは、必ず他に隠してあるんだな。」

「では一つ探して見ませうか。」

「さうしてくれ給へ。」

ど、探偵長は命令を下した。

またぞろ一同の探偵はこの不可思議な地下室を探しはじめたが、何うしてもそれらしいものが解らない、それにそれを入れた様な箱らしいものも見えなければ、それをかくしてあると思はれる處もない。

「ありませんな。」

ど、一人の探偵が、探しあぐんで慥う云ふと、

「何うも解らん。」

ど、安井探偵もガツカリした様に云ふ。

「ちや、それは後でまた探すとして、兎に角外へ出やう、そしてこの邸内に悪漢が居るに違ひないから、それを逮捕しやう。」

「承知しました。」

ど、一同は探偵長の言に服した。

「それちや私我先に出て見やう。」

ど、探偵長は不可思議な箱を抱えて、骸骨の後にあつた抜け穴へ這入り込んだ。

その後へ未亡人が連いて、一同の探偵も腹ばひになつて、ズラリ／＼と出て来た。

最後に安井探偵は、卓也の若い時代の寫眞を抱えて抜け穴へ潜り込んだ。

先頭に出た探偵長は、ソロリくと、堅い土地の上を這つて來ると、漸々明るくなつて來た、そして外と同じ明るさの處へ來た時に、先は行きづまりになつて、二疊敷き位の廣さになつて、そこはもう立つ事が出來た。

探偵長は、やをら、起き上つて上の方を見ると、晝の空が見えた。

「あツ有難いぞツ。」

と、岩石を足場に、土地の上へ出て見ると、そこは築山の後の古

井戸だつた。

一同が上つて來ると、探偵長は一同に向つて、

「なか／＼巧妙に出來てゐるね。」

と、感心した。

「こゝは、底なしの井戸だと、常々主人に云はれてゐましたが、眞逆、この井戸が抜け道とは今まで少しも知りませんでした。」

と、未亡人も驚いてゐた。

「さア一刻も早く、悪漢を逮捕しなければならぬと、一同は庭から、座敷へ戻つて、書齋の前へ來ると、室内は大變な騒ぎ、何うした事かとソツとのぞいて見ると、巡査が五六人來て居て

家婢と共に書棚を押してゐる處だつた。

『おい、何うしたんだ。』

と、探偵長はツカ／＼と這入つて、ニコ／＼笑つて、一同を見廻すと、それについて他の探偵等も、未亡人も這入つて來たので、平助をはじめ、岡田、お花、他の者までが、

『おやッ。』

『あれッ。』

『奥様。』

『旦那様がた。』

と、云ふばかりで、唯驚いて、眼ばかりバチ／＼させて、鳩が豆

鐵砲を喰つたかたち……。

『は、ア、俺達はこの通りだ。』

と、ニヤリと笑つた探偵長の顔を見た平助は、始めてそれと氣がついて、

『ご、何うして出ておいでになりました。』

『それより、何故、この書棚で蓋をしたのだ。』

『さア、その事で今大騒ぎをいたして居りましたので御座いますよ。』

と、嬉しそうにニコ／＼して、

『實は貴方様方が地の下へ降りておいでになつた後で、私達は心

配して下を覗いて居りました時、何うした事か、スーと音もなく書棚が動いて、蓋になつてしまつたので、一時は腰を抜さんばかりに驚いて、

「さア大變だ、今に皆さんがこの室へお歸りになる時、お驚きになるだらう、早くこの書棚をのけなければならぬ。」
と、一同で力を合せて、力一杯に押しましたが、なか／＼テコでも動きさうもありません、そこで一刻も早く取りのかなかちや、息がつまつて死んでしまふと、イクラ、あせつても何うする事も出来ませんので、この通りお巡査さんにお願ひして、早く取りのかうとあせつて居つた處で御座います。」

と、眞實を顔に現はしての物語。

「でも、まア、無事でしたから、私達はこんなに嬉しい事は、まだと御座ません。」
と、嬉し涙さへ流して喜んでゐた。

この有様を見ては、とても嘘とは思えぬので、探偵長始め、一同はますます不思議に思つて、いよ／＼解らなくなつて來た。

「兎に角、今日はこの儘一度引き上げて、いよ／＼研究する事としやう、そのうちには中田探偵も歸つて來る事でもあらうから。」
と、引き上げに決した。
この時、未亡人は進み出て、